

## 2000年度（第2回）学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」

### 総 評

難 波 江 和 英

2000年度の「女性学インスティテュート賞」で受賞の対象となった論文は、磯田早穂子氏の「The Mission of Baden-Powell: A Gender Study of the Boy Scouts and the Girl Guides in Britain」（英文）と関原綾乃氏の「Giselle 幻想」の二篇であった。たしかに応募件数そのものが少なかったことは残念であったが、それぞれの論文は読みごたえがあり、執筆者の努力を如実にあらわした力作であった。

論文審査にあたっては、二篇の論文について、それぞれのテーマに見合った審査員を三名ずつ選び、その審査結果を女性学インスティテュートの本選考委員会（2000年9月29日）で慎重に検討した。その結果、最優秀賞に該当する論文はなかったものの、磯田氏の論文が「優秀賞」に選ばれた。ここで今回の「女性学インスティテュート賞」に提出された二篇の論文に対する講評を紹介しておく。

磯田氏の論文は、ボーイ・スカウトとガール・ガイド（ガール・スカウト）の創始者にあたるロバート・ステファンソン・ベーデン・パウエルが「良き市民の育成」という理念を標榜していたことをふまえて、その理念に隠されていたセクシュアリティの言説をジェンダー論を用いて分析し、少年少女がスカウト活動をとおして、実際どのように「良き市民」として形成されていったかを論証するものである。三名の審査員たちは共通して、この論文の主題に独自性があることを高く評価しながらも、その主題を展開していくときの手順と方法に問題があるとした。たとえば、「Methods of gender studies」の“Methods”の定義、「良き市民」の定義、「良き市民」の言説と表題の“Mission”との関係、「良き市民」から「グローバルな市民」への推移のプロセス、創始者の女性観（「女性=母」）の論証、ガール・ガイドに参加した少女たちの意志、等々である。たしかにこの論文は、ボーイ・スカウトとガール・スカウトの運動の歴史を概論風にたどるあまり、どうしても「説明」が増えて、論証のための「分析」が不十分になっている。それが改善されていれば、これは「最優秀賞」に該当

していた可能性もある論文だっただけに残念であった。

関原氏の論文は、古典バレエの『ジゼル』のなかに認められる男女の相関関係の多重性を身体表現芸術の観点から論証するものである。いずれの審査員も、このトピックの設定を高く評価したものの、それを女性学に関連した論考として展開していく構成力に欠ける点を問題にした。たとえば複数の審査員から、「論文の構成や内容については、粗雑なところが見受けられる」、「特定の方針をもつ懸賞論文としては、形式・内容ともにあまりにも総括的・総論的にすぎる」といった指摘がなされている。それに加えて、やはり複数の審査員から、先行する研究について言及がないので、「どこまでがオリジナルな論なのか不明である」との意見も寄せられている。しかし、この論文でもっとも問題があると見なされたのは、構成力や独自性もさることながら、「女性学との接点をほとんどもっていない」ことであった。そのため審査員たちは、文章力はあると認めた上で、これを女性学インスティテュート賞の対象とするのは「不相当」と判断した。この賞があくまで「女性学」に関する論文を対象としている以上、執筆者は論点を絞りこんで議論を展開していくことを求められているからである。

この講評は、今回の応募者たちにとってばかりではなく、これからの応募者たちにとっても、ひとつの指針になると考えられる。本学の「女性学インスティテュート」をさらに発展させるためにも、そして「女性学」そのもののヴィジョンを拡げていくためにも、この内容を参考にして、より多くの人たちがこの賞に応募してくれることを願ってやまない。

(女性学インスティテュート学生懸賞論文選考委員)

#### 〈学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」〉

本学学生（学部生・大学院生）及び前年度の本学卒業生・修了生が執筆した、女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文が賞の対象となる。最優秀賞論文（1編）には5万円の賞金及び賞状、優秀賞論文（2編）には各2万円の賞金及び賞状が授与され、最優秀賞論文については当インスティテュート発行の『女性学評論』（年1回：3月発行）に全文が掲載される。

第3回（2001年度）論文募集の締切は2001年7月23日。選考結果の発表及び表彰は2001年10月中旬の予定である。詳細は当インスティテュートまで。